

日本学術会議地域研究委員会地域情報分科会・地球惑星科学委員会IGU分科会

地名標準化の現状と課題：地名データベースの構築と
地名標準化機関の設置に向けて

地名に見る地域の歴史と 漢字表記の難しさ

狩俣 繁久

日本学術会議連携会員、琉球大学名誉教授

万葉仮名

『古事記』(712年)、『日本書紀』(720年)の日本人の名前や地名、『万葉集』(951年)の和歌は、漢字の表す意味を無視し、その音(発音)を利用して漢字だけで書かれていた。

宇利	波米婆	胡藤母	意母保由
瓜	食めば	子ども	思ほゆ
久利	波米婆	麻斯堤	斯農波由
栗	食めば	まして	偲ばゆ
伊豆久欲利	枳多利斯	物能曾	
何処より	来たりし	ものぞ	
麻奈迦比爾	母等奈	可利堤	
目なかいに	もとな	掛かりて	
夜周伊斯	奈佐農		
安眠し	なさぬ		

万葉仮名的漢字表記

漢字の表す意味を無視して、その漢字の表す音（おと）、を利用して和語（日本語）を表記する漢字の使い方を『万葉仮名』という。

次の沖縄の地名表記も万葉仮名的な漢字表記である。

那覇（なは）、嘉手納（かでな）、普天間（ふてんま）
与論（よろん）、座間味（ざまみ）、渡名喜（となき）

同様の万葉仮名的な漢字表記の地名は日本各地にあると考える。

ひらがな

日本語の音節を漢字で書き表した万葉仮名から生まれたのが「ひらがな」と「カタカナ」である。

ひらがなは、万葉仮名の漢字を簡略にくずした草書体、すなわち点画を略して書いていたものが固定したものである。

奈 → な、	安 → あ、	以 → い
宇 → う、	寸 → す、	世 → せ
礼 → れ、	仁 → に、	由 → ゆ
与 → よ、	毛 → も、	女 → め
太 → た、	保 → ほ、	也 → や
計 → け、	良 → ら、	曾 → そ

カタカナ

カタカナは、万葉仮名の漢字の一部をとって作ったものである。

奈 → ナ、	阿 → ア、	伊 → イ
宇 → ウ、	江 → エ、	於 → オ
加 → カ、	介 → ケ、	多 → タ
千 → チ、	仁 → ニ、	奴 → ヌ
万 → マ、	利 → リ、	天 → テ
比 → ヒ、	不 → フ、	良 → ラ

万葉仮名もひらがなもカタカナも日本語の単語の音節を書き表す。

日本語の単語とその表記

もともと日本語には存在しない物や概念とともに、それを表す中国語の単語が借用語として日本に入ってきた。古代中国語から日本語にとりこまれた借用語を漢語という。

中国語の単語の発音を日本語の音韻体系にあわせて発音したもの、すなわち、漢語を表す漢字の読みを音読みという。

金(キン)	銀(ギン)	鉄(テツ)	銅(ドウ)
百(ヒャク)	千(セン)	万(マン)	億(オク)
質(シツ)	量(りょう)		
線(セン)	点(テン)	熱(ネツ)	駅(エキ)
茶(チャ)	愛(アイ)	脈(ミヤク)	

訓読み

日本語の単語＝和語を万葉仮名で書き表さず、漢字の表す意味を媒介にして、その漢字を日本語の発音で読んだのが訓読み。

音＝発音

訓＝発音

シュ

手

て



カ

花

はな



訓読み

顔(かお)	胸(むね)	腹(はら)	鼻(はな)
百(もも)	万(よろず)	風(かぜ)	雨(あめ)
星(ほし)			
父(ちち)	母(はは)	兄(あに)	姉(あね)
草(くさ)	花(はな)	種(たね)	木(き)

熟字訓

「きょう」「あす」「きのう」などの和語は、「むね」「あし」「からだ」「あめ」「のこぎり」「おとうと」などの和語と同じ単純語である。

和語の単純語を漢字2文字以上を使って表すとき、その漢字の読みを熟字訓という。

今日(きょう)、明日(あす)、昨日(きのう)、
大人(おとな)、一人(ひとり)、紅葉(もみじ)、
梅雨(つゆ)、時雨(しぐれ)、足袋(たび)、
煙草(たばこ)、東風(こち)、五月雨(さみだれ)

漢字の複数の読み

漢語を漢字の音読みと、和語を書き表す漢字の訓読みが共存することで、1個の漢字に複数の読みが存在させることになった。これは子どもたちの漢字学習を妨げる要因でもある。

目

訓読み	め	目が痛い。 目薬、 <u>一目</u> 、目尻、目上、 <u>目下</u>
	ま	目蓋(瞼)、目の当り、
音読み	モク	目前、目標、目的、曲目、 注目、 <u>一目</u> 、盲目、
	モツ	<u>目下</u> 、
	ボク	面目、
熟字訓		目眩(めまい)／目脂(めやに)

日本で話される伝統的言語

日本語とアイヌ語

日本語

┌ 日本語標準語
└ 日本語諸方言

┌ 本土方言
└ 琉球方言

琉球列島を本州に重ねる

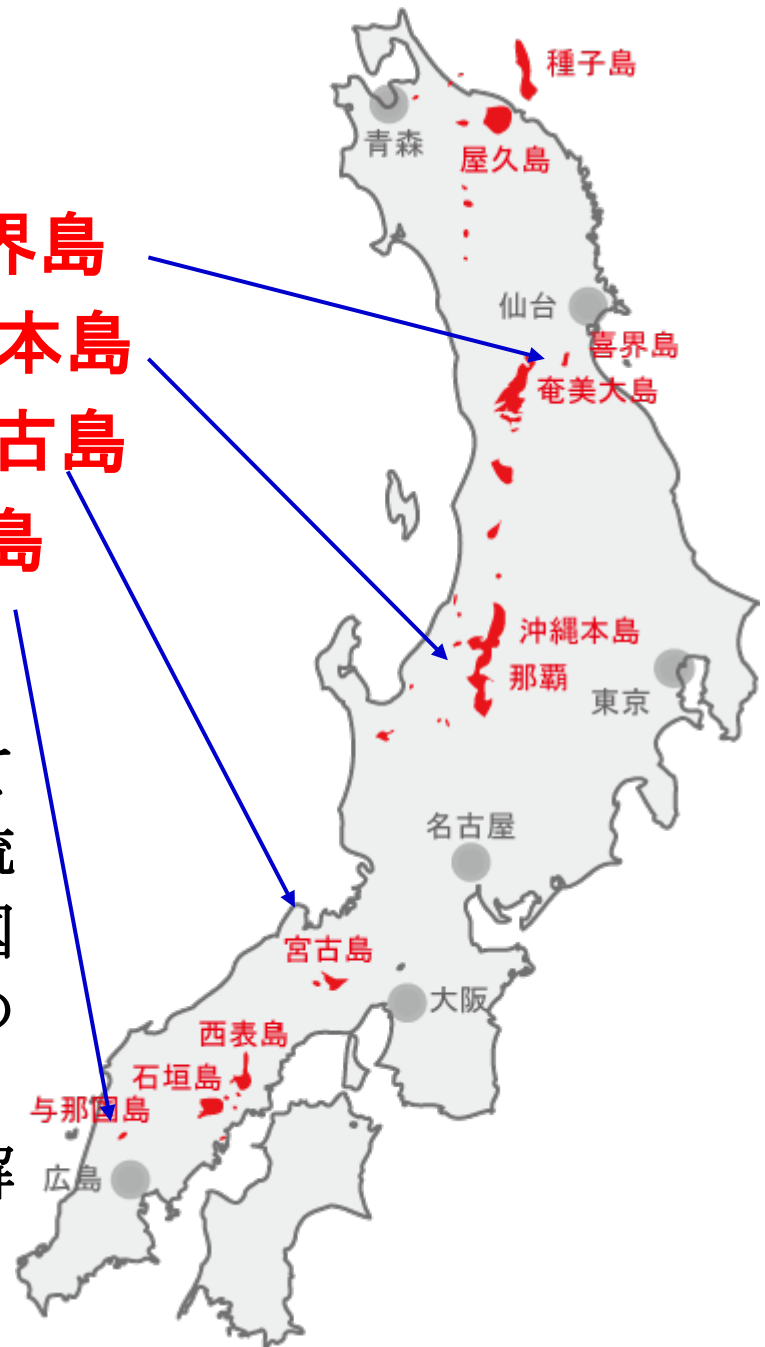
最北端の喜界島

沖縄本島

宮古島

最西端の与那国島

琉球方言は、47の有人島で話されていて、その内部の言語差は大きく琉球列島の両端の喜界島方言と与那国方言では全く通じない。沖縄本島の人は宮古方言を全く理解できない。石垣島の人は与那国方言を全く理解できない。



琉球列島の地名表記

音読みを利用した万葉仮名地名

那覇、首里、知念、辺戸、古宇利、幸喜、天願、
安慶名、伊良部など

訓読みを利用した万葉仮名地名

沖縄、浦添、竹富、鳩間、池間、狩俣、石川など

音読みと訓読みの混ざった万葉仮名地名

宮古、与那国、渡名喜、呉我山、宜野湾、名護、
嘉手納など

これらの地名の漢字表記も、音読みと訓読みを利用した万葉仮名的な漢字使用である。

発音の変化

次の沖縄県の地名はいずれも方言地名の発音に漢字を万葉仮名風に当てたものである。漢字表記をあてたのちに発音が変化(音韻変化)したのに、漢字表記がそのままになっているので、難読地名になったものである。

今帰仁 なきじん

イマキジン → イミヤキジン → イニヤキジン → イナキジン → ナキジン

ima 口蓋音化 → imja 脱唇音化 → inja 脱口蓋音化 → ina → 母音脱落 na

保栄茂 びん

ボエモ → ビモ → ビン

boemo 母音の相互同化 → bimo 母音の鼻音化 → bim^õ 脱唇音化 → bin

北谷 ちゃたん

キタタニ → キチャタニ → ツチャタニ → チャタニ → チャタン

kitatani 口蓋音化 → kitʃatani 母音脱落 → ttʃatani 子音脱落 → tʃatan

方言地名 比嘉は東

方言地名を万葉仮名的に表記すると、その地名の語源や由来が分からなくなる。

東 ひがし 訓よみ

ひむか → ひんが → ひが

himuka 母音の鼻音化 → himũka 脱唇音化 → hiũka 有声音化 → hinga → 音脱落 higa

日向 ひゅうが 訓読みの万葉仮名

ひむか → ひんか → ひんが → ひうが

himuka 母音の鼻音化 → himũka 脱唇音化 → hiũka 有声音化 → hiũga → 脱鼻音化 hiuga

比嘉 ひが 音読みの万葉仮名

ひむか → ひんが → ひが

himuka 母音の鼻音化 → himũka 脱唇音化 → hiũka 有声音化 → hinga → 音脱落 higa

※「比嘉」は音読みの万葉仮名的表記によって語源が分からなくなった
「比嘉」は地名と名字だけに残った。

漢字の方言読み＝方言訓

漢字のあらわす意味を媒介にして、対応する琉球方言の単語の発音で読み読みならわしたものを方言訓とよび、琉球方言の読みを琉球訓とよぶ。

訓		琉球訓	
にし	西	いり	西表島、浦添市西原
ひがし	東	あがり	名護市東江
しろ	城	ぐすく	中城、豊見城、城辺
すな	砂	うる	宮古島市砂川(うるか)

琉球訓＝方言訓は、難読地名の原因である。

同じ語源の異なる表記

琉球方言固有の地形を表す方言語形に由来する地名を万葉仮名的に表記したことによって語源が分からなくなった地名

かねく(砂地)、

金久、大金久(奄美市)、大兼久(名護市)

はんた(崖っぷち、端)

繁多川(那覇市)、西原町坂田

いり(西)

北谷町伊礼(西方の集落)

しり(後方)

うるま市志林川(後方の湧泉)

万葉仮名表記と琉球訓の方言地名

琉球方言

ひら(上り坂・斜面)、かわ(湧泉)、はる(耕作地・畑)

平川

ひらかわ(斜面の湧泉) 訓読みの万葉仮名

西平

にしにら(北の斜面) 訓読みの万葉仮名

西原

にしはら(北の耕作地) 訓読みの万葉仮名

西原

いりばる(西の耕作地) 琉球訓と訓読みの万葉仮名

琉球訓は、難読地名を生むが、地名の由来を知る手がかりを与える。

方言地名の万葉仮名的表記は地名の由来を分からなくする。